

## 序

平安朝の物語は、しばしば内裏の奥深く——後宮を扱い、そこに住む天皇・東宮の皇妃たちに焦点を当てている。後宮というものは、物語を書く上で欠かせない一要素になっていた。それは、平安時代、藤原氏が娘を次々と入内させ、生まれた男子を次代の帝に据えるという実態があったからこそである。物語もそうした現実を鋭くとらえ、主人公の栄華を、その姉妹や娘を後宮に入内させ、中宮、国母と為すこと<sup>注1</sup>によって、達成するのである。その一方で、物語は、後宮に住まう皇妃と臣下の恋愛を好んで描いた。教養と美貌を兼ね備えた高貴な女性たち——高嶺の花である皇妃と臣下との恋愛は、許されることのない禁じられたものであり、それだけ当事者たちの深刻な苦悩を浮かび上がらせ、その内面を掘り下げるのに格好の主題であった。

このように、物語で主要な役割を果たす後宮であるが、しかし、その後宮について、現代に生きる読者がどれほどの正確な知識を持っているかといえば、例えば皇妃の身分や呼称、皇妃の居住空間の用いられ方など、まだまだ分からないことばかりである。我々は、物語の記述に引きずられて、それを鵜呑みにしがちであるが、そこには物語特有の設定<sup>注2</sup>がありうることを忘れてはならない。物語を正しく読み解くためには、何が現実を踏まえているか、何が作者によって生み出された虚構なのかを、史実を精査し物語の設定と比較検討することによって、まず見分けていく必要があるだろう。

本書を通じて、私は、史実との照らし合わせで物語の後宮にまつわる記述がどの程度の真実味を持つかを明らかにしたうえで、物語をよりいっそう理解するのに役立ててみたい。後宮といっても、成員としての後宮——皇妃と後宮女官たち——、建物としての後宮などさまざまな面があるが、ここでは、主として皇妃の居所たる後宮殿舎及びその用いられ方を問題として扱う。一般に、建物の場合の後宮を言うときは、仁寿殿の後方にある七殿（承香殿、弘徽殿、麗景殿、宣耀殿、貞観殿、登花殿、常寧殿）五舎（飛香舎、凝華舎、淑景舎、昭陽舎、襲芳舎）を指すようだが、そのように限定せず、皇妃たちの住む建物<sup>注3</sup>という意味で広くとらえて見ていく。平安朝の皇妃たちは、内裏にそれぞれ曹司<sup>注4</sup>を与えられてそこで生活し、居所とする建物の名で呼ばれる。物語の皇妃たちも、例に漏れず、そのほとんどが殿舎名型呼称で呼ばれていた。

物語における殿舎の記述は、何気なく読み飛ばされていることが多いが、実は重要な情報を含んでいることが多い。一例を挙げれば、『源氏物語』で、主人公光源氏の母桐壺更衣が、その立場の弱さから、帝の住む清涼殿から最も離れた桐壺（淑景舎）を局としていた一方で、桐壺更衣を憎む悪役として知られる弘徽殿女御は、対照的に、清涼殿に隣接し後宮の筆頭皇妃の住まいであった弘徽殿を用いていた。両者の身分の上下関係を実に際立たせた設定であるといえよう。現代の我々には、とっさに桐壺や弘徽殿が内裏のどこにあるかなどは思い浮かばないが、当時の読者にはそれが常識であり、いちいち説明されなくても分かっていたのであった。

作者がわざわざ書かなかった部分まで含めて物語を理解するためには、当時の殿舎の実態を知らなければならぬが、それについては、未だ完全には解明されていないというのが現状である。国文学において、後宮殿舎に論及する先行研究もそこまで多くはない。<sup>注5</sup>基礎研究とも言うべき増田繁

夫氏の「弘徽殿と藤壺——源氏物語の後宮——」（『国語と国文学』一九八四年十一月）は、各々の後宮殿舎にまつわる史実を調査し、一条朝までの歴代の殿舎の居住人物を確定させている点で大変有益であるが、全ての後宮殿舎をまとめて取り扱う故に、個々の殿舎の特徴をとらえ切れていないところがあり、見逃している部分も多い。一つ一つの殿舎をもう少し丁寧に見ていき、実際はそれぞれの時代にどのように用いられていたか、どういった立場・身分の人々が居所としていたか、改めて調べ直した上で得た情報を、物語に還元していく必要があるだろう。

本書では、各殿舎についてそれぞれ史料を徹底的に調査する中で新たに知り得た情報を手掛かりに、現存する最古の長編物語で、初めて後宮に関する詳細な記述を有した『宇津保物語』と、その影響を多大に受けつつも、さらに発展させ、巧みに後宮を描き出した『源氏物語』の二作品を考察し、その後宮空間を描き出す方法に迫る。

全体は三編から成る。

第一編は「『宇津保物語』の後宮空間」と題し、これまであまり取り上げられることのなかった『宇津保物語』の後宮殿舎設定——朱雀帝后宮が用いた常寧殿（第一章「朱雀帝后宮考——常寧殿を用いる母后——」、源正頼大君（仁寿殿女御）の曹司である仁寿殿（第二章「仁寿殿女御考——その殿舎をめぐって——」、東宮妃である藤原仲忠妹の住まいとなった梨壺（昭陽舎）（第三章「東宮の後宮——梨壺の問題を中心に——」）が、どれも皇妃の居所として決して無作為に選び出されているわけではなく、史実におけるその殿舎のイメージを投影しようとする意図によって、設定されていることを論じる。

第二編「宇津保物語」から『源氏物語』への展開」では、従来『源氏物語』作者独自の工夫と見なされてきたいくつかの後宮殿舎設定の源泉が、実は『宇津保物語』にあること、しかし『源氏物語』の設定は『宇津保物語』に倣いつつもそこから格段に進化させていることなどを明らかにする。第一章「殿舎名で呼ばれる更衣たち―梅壺更衣から桐壺更衣へ―」は、本来殿舎名で呼ばれるはずのない（殿舎を居所としてまるごと一つ与えられるはずのない）更衣が『源氏物語』のみならず『宇津保物語』にも登場していたことを問題とした。第二章「藤壺の系譜―『宇津保物語』あて宮を始発として―」は、藤壺という殿舎の共通性を足掛かりに、帝寵も権力も手中にした皇妃が男主人公に愛されるという設定が、『宇津保物語』のヒロインあて宮から『源氏物語』の藤壺中宮に継承されていったことを述べたもの。第三章「宇津保・源氏の承香殿―悲願を果たしえぬ皇妃たち―」では、『宇津保物語』『源氏物語』共に承香殿を敗北者の皇妃の住まいとして描いているのは、平安朝の承香殿の皇妃たちが身分の高さの割に皇后にも母后にもなれなかった現実を反映したものであることを説く。

最後の第三編『源氏物語』の後宮空間」では、他作品には見られない『源氏物語』の後宮殿舎の記述やその用いられ方に着目し、それらがいかに物語の文脈にそって自然に設定されているか、のみならずその場面の読みを深める鍵となっていることについて分析した。『源氏物語』という作品は、調べつくされ、これ以上検討の余地がないと思われるがちであるが、後宮殿舎設定一つをとっても、見過ごされていることが多々あることを示す。第一章「斎宮女御の梅壺入り―後見との関わりをめぐって―」では、梅壺（凝華舎）という殿舎について、史実では政治的に劣った立場の皇妃たちの居所となっていたことを指摘した上で、権力者光源氏を後見に持つ斎宮女御が格下の梅壺に入ったのは、彼女の入内当時、源氏が兄朱雀院への配慮から表立って彼女を支援していなかった（また養親子関係を結んでいなかった）からである、という新たな解釈を提示する。第二章「玉鬘の踏歌見物―宮中参内の意義をめぐって―」では、真木柱巻の玉鬘が、出仕にあたって王女御と承香殿を共用したことを問題とし、併せて物語における玉鬘の宮中参内の意義を探ることを目的とした。第二編第三章を補足し、承香殿について、西側が皇妃の居所となる一方で、東側は常に空けられ、臨時にさまざまな用途で用いられていたという仮説を立て、共用という特殊な形態が為されたことの意味を解き明かす。この章では、冷泉帝と玉鬘の恋が『宇津保物語』から色濃く影響を受けていることを述べているが、後宮空間の使用という視点からは、第二編よりも第三編におくのがよりふさわしいと判断し、こちらに入れた。第三章「女三宮の輿入れ―入内・参院儀礼と比較して―」は、近年主張される、女三宮の六条院入りは「降嫁」ではなく入内に準じたものとする説を、再考したもの。天皇の婚姻儀礼を検討する中で、後宮空間がどのように用いられるかを明らかにし、女三宮の婚姻と比較する。第四章「宿木巻の藤壺女御―繰り返される藤壺―」は第二編第二章の続編ともいべき論で、朱雀帝・今上帝の藤壺女御の居所が、物語中の過去をなぞるようにして設定されていくことの意味を考える。

- 1 秋山虔氏は、後宮世界が『源氏物語』第二部・第三部で圏外に外れていくことを指摘した上で、「光源氏がどのようにして、この世の最高の境地へ上りつめて行くかその経過にこそ、後宮世界のありさまが大きな意味をもつて不可分に参加していたのである。社会的・政治的進退は必ず後宮とのつながりに関して具体性をもつ。後宮世界は単にそれじたいとして存するのでなく、その背後に浮沈を賭けた権門勢家の競合がある」（『源氏物語の後宮世界』）（『解釈と鑑賞』一九五九年四月）と述べる。
- 2 鷺山茂雄氏は、『源氏物語』は正しく史実を踏まえており、掟が厳然と守られていた時代を映しているのだ、という思いが読者を幻想に駆り立てているとする（『桐壺』巻の分析）（『源氏物語の語りと主題』、二〇〇六年、武蔵野書院）。また、吉海直人氏は、我々が史実と異なる物語の描写をきちんとした検証もなしに常識としていることを批判しており、物語の中には「あらまほしき幻想」があると述べている（『宮中殿舎の幻想を問う―桐壺を中心として―』）（『叢書想像する平安文学』第七巻、二〇〇一年、勉誠出版）。
- 3 七殿五舎以外の建物にも皇妃が住んだことがある。例えば『二代要記』によると、清和天皇の女御厳子・貞子は「温明殿女御」と称されており、温明殿を居所としていたことがうかがえる。
- 4 曹司・局については、殿舎や邸宅等の区切られた一区画とのイメージが強く、殿舎を部分的に使用したとされる更衣ではなく、まるごと一つ用いたに違いない女御・后の居所を指す言葉として妥当か否かという問題がある。しかし、『宇津保物語』や『狭衣物語』には、女御の居所を「局」とする例があり、また、『河海抄』初音所引『醍醐天皇御記』延喜十三年男踏歌の記事では、女御穂子の居所、弘徽殿が「曹司」とされている。よって本書では、皇妃の内裏での居所を指す語として、これらを用いることにする。
- 5 角田文衛「平安内裏における常御殿と上の御局」（『王朝文化の諸相』、一九八四年、法蔵館）、増田繁夫「弘徽殿と藤壺―源氏物語の後宮―」（『国語と国文学』一九八四年十一月）、「源氏物語の後宮―桐壺・藤壺・弘徽殿―」（『源氏物語の

鑑賞と基礎知識 1 桐壺』、一九九八年、至文堂）、高田信敬「後宮殿舎の使われ方―玉鬘出仕を手がかりに―」（『源氏物語考証稿』、二〇一〇年、武蔵野書院、初出は『むらさき』一九九四年十二月）、吉海直人「桐壺更衣の政治性」（『源氏物語の新考察』、二〇〇三年、おうふう、初出は『國學院雑誌』一九九一年五月）・注2論文、植田恭代「源氏物語の宮廷文化―後宮・雅楽・物語世界」（二〇〇九年、笠間書院）など。

平安朝物語の後宮空間  
——宇津保物語から源氏物語へ——  
目次

序	.....	i
平安宮内裏図	.....	vi
凡例	.....	xvi

## 第一編 『宇津保物語』の後宮空間

第一章 朱雀帝后宮考——常寧殿を用いる母后——	.....	3
一 はじめに	.....	3
二 史実における常寧殿（后町）	.....	5
三 母后の内裏滞在と政治	.....	10
四 結び	.....	18

第二章 仁寿殿女御考——その殿舎をめぐって——	.....	29
一 はじめに	.....	29
二 史実における仁寿殿	.....	30
三 『宇津保物語』の仁寿殿	.....	34
四 後宮の主役、仁寿殿女御	.....	36
1 内侍のかみ巻と仁寿殿女御	.....	36
2 華麗なる「賄ひの女御」	.....	38

五	結び	42
第三章	東宮の後宮——梨壺の問題を中心に——	49
一	はじめに	49
二	史上における梨壺の皇妃——慶子と安子	50
三	仲忠妹の設定——梨壺に住まう東宮妃	53
四	内裏にひしめく東宮妃たち——非現実的な東宮後宮	57
五	結び	60

## 第二編 『宇津保物語』から『源氏物語』への展開

第一章	殿舎名で呼ばれる更衣たち——梅壺更衣から桐壺更衣へ——	67
一	呼称「桐壺更衣」の先行研究と問題点	67
二	皇妃の俗称としての「更衣」	70
三	忠こそ巻と桐壺巻	74
第二章	藤壺の系譜——『宇津保物語』あて宮を始発として——	83
一	はじめに	83
二	史実における藤壺の皇妃たち	85

三	あて宮と藤壺	88
四	藤壺中宮への影響	92
1	寵妃から母后への変貌	92
2	男主人公との絆——密通の有無	96
五	結び	98

第三章	宇津保・源氏の承香殿——悲願を果たしえぬ皇妃たち——	105
一	はじめに	105
二	史上の承香殿女御——時めかぬ女御たち	106
三	物語の承香殿たち——後宮の脇役としての造型	114
四	結び	125

## 第二編 『源氏物語』の後宮空間

第一章	斎宮女御の梅壺入り——後見との関わりをめぐって——	139
一	はじめに	139
二	梅壺の皇妃たち	140
三	光源氏の配慮「うけばりたる親さまには聞こしめされじ」	144
四	結び	148

第二章	玉鬘の踏歌見物——宮中参内の意義をめぐって——	155
一	はじめに	155
二	承香殿の共用	156
三	男踏歌の六条院への不参	162
四	天皇と臣下の人妻の恋	166
五	結び	172
第三章	女三宮の興入れ——入内・参院儀礼と比較して——	181
一	はじめに	181
二	平安時代の天皇・上皇の婚姻儀礼	182
	1 先行研究の問題点	182
	2 益田勝実説の再検討	187
三	「准太上天皇」の利用	190
四	結び	194
第四章	宿木卷の藤壺女御——繰り返される藤壺——	203
一	はじめに	203
二	御代替わりに伴う皇妃の移動	204
三	物語の内なる準拠	211
四	結び	218
	初出一覧	226
	あとがき	228
	索引	228



凡例

- 一、『源氏物語』の引用は『新編日本古典文学全集』（小学館）、『宇津保物語』の引用は室城秀之校注『うつほ物語 全 改訂版』（おうふう）により、巻名および頁数を記した。引用文には私に傍線や注記を施した。
- 二、その他文学作品の引用は、特に断らない限り、『新編日本古典文学全集』（小学館）による。
- 三、和歌の引用は、特に断らない限り、『新編国歌大観』による。
- 四、『宇津保物語』の引用した注釈については、以下のように略称を用いた。
  - ・武笠三校注 有朋堂文庫『宇津保物語』（有朋堂書店）↓〈有朋堂文庫〉
  - ・宮田和一郎校注 朝日古典全書『宇津保物語』（朝日新聞社）↓〈朝日全書〉
  - ・河野多麻校注 日本古典文学大系『宇津保物語』（岩波書店）↓〈大系〉
  - ・原田芳起校注 角川文庫『宇津保物語』（角川書店）↓〈角川文庫〉
  - ・野口元大校注 校注古典叢書『うつほ物語』（明治書院）↓〈校注古典叢書〉
  - ・室城秀之校注 『うつほ物語 全 改訂版』（おうふう）↓〈おうふう〉
  - ・中野幸一校注 新編日本古典文学全集『うつほ物語』（小学館）↓〈新全集〉
- 五、『源氏物語』の古注釈書の引用は、特に断らない限り、『河海抄』は『紫明抄・河海抄』（角川書店）、その他は『源氏物語古注集成』（桜楓社）による。
- 六、『大内裏図考証』の引用は、『改訂増補 故実叢書』（明治図書）による。
- 七、史書・古記録などの歴史資料の引用は、『六国史』・『日本紀略』・『扶桑略記』・『本朝世紀』は『国史大系』（吉川弘文館）、『西宮記』は『神道大系』（神道大系編纂会）、『二代要記』は『続神道大系』（神道大系編纂会）、『貞信公記』・『九曆』・『小右記』は『大日本古記録』（岩波書店）、『権記』は『史料纂集』（臨川書店）、『大鏡裏書』は『日本古典文学大系』（岩波書店）による。ただし、私に一部表記を改めた所もある。その他の資料による場合は、その都度記した。また、随時『大日本史料』（東京大学出版会）を参照した。